朝夷巡嶋記

第五編　卷四

113
939
N24

門 1 13
939
巻 10

朝東巡嶋記全傳第五編巻之四

東都　曲亭主人編輯

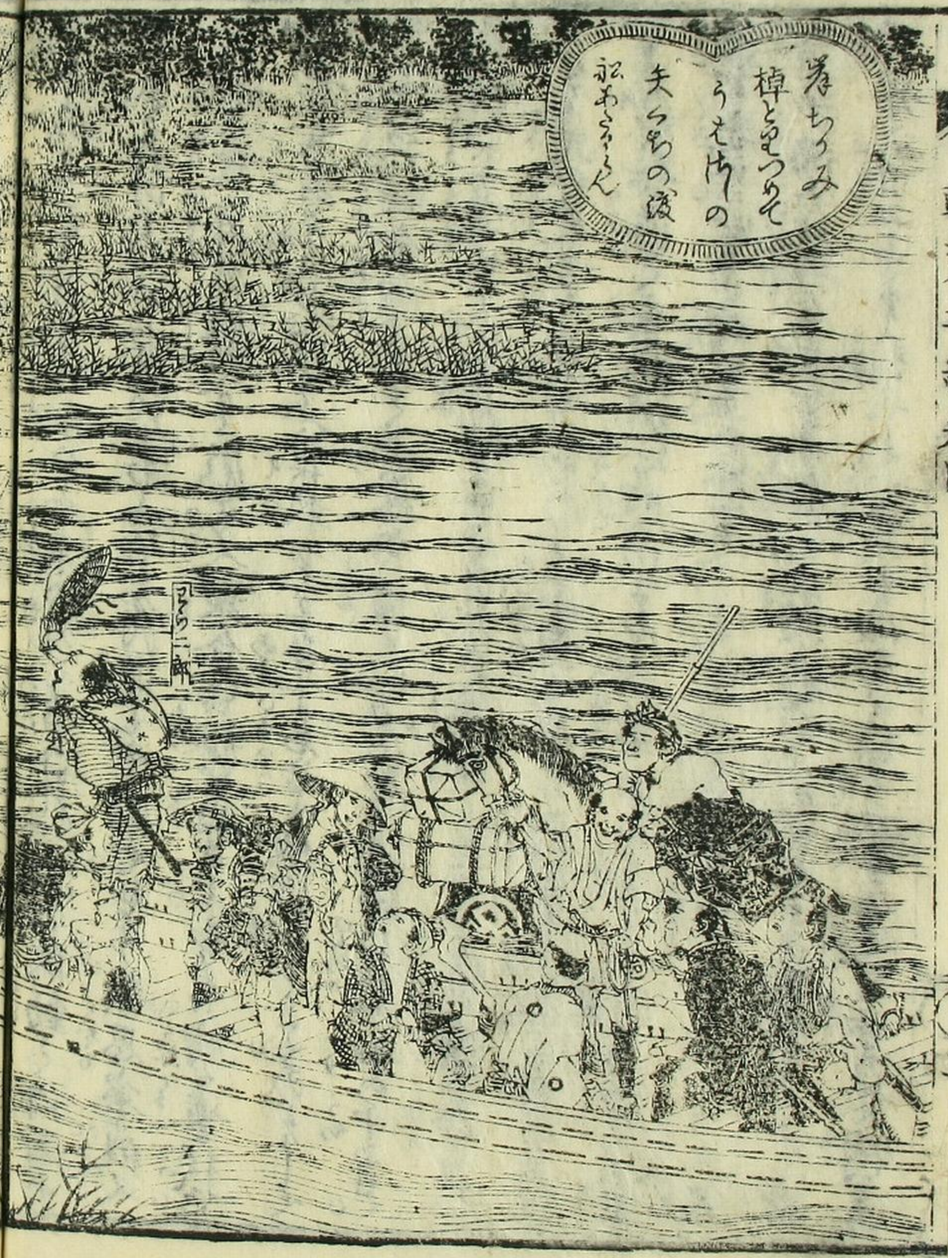
後輯第四十七

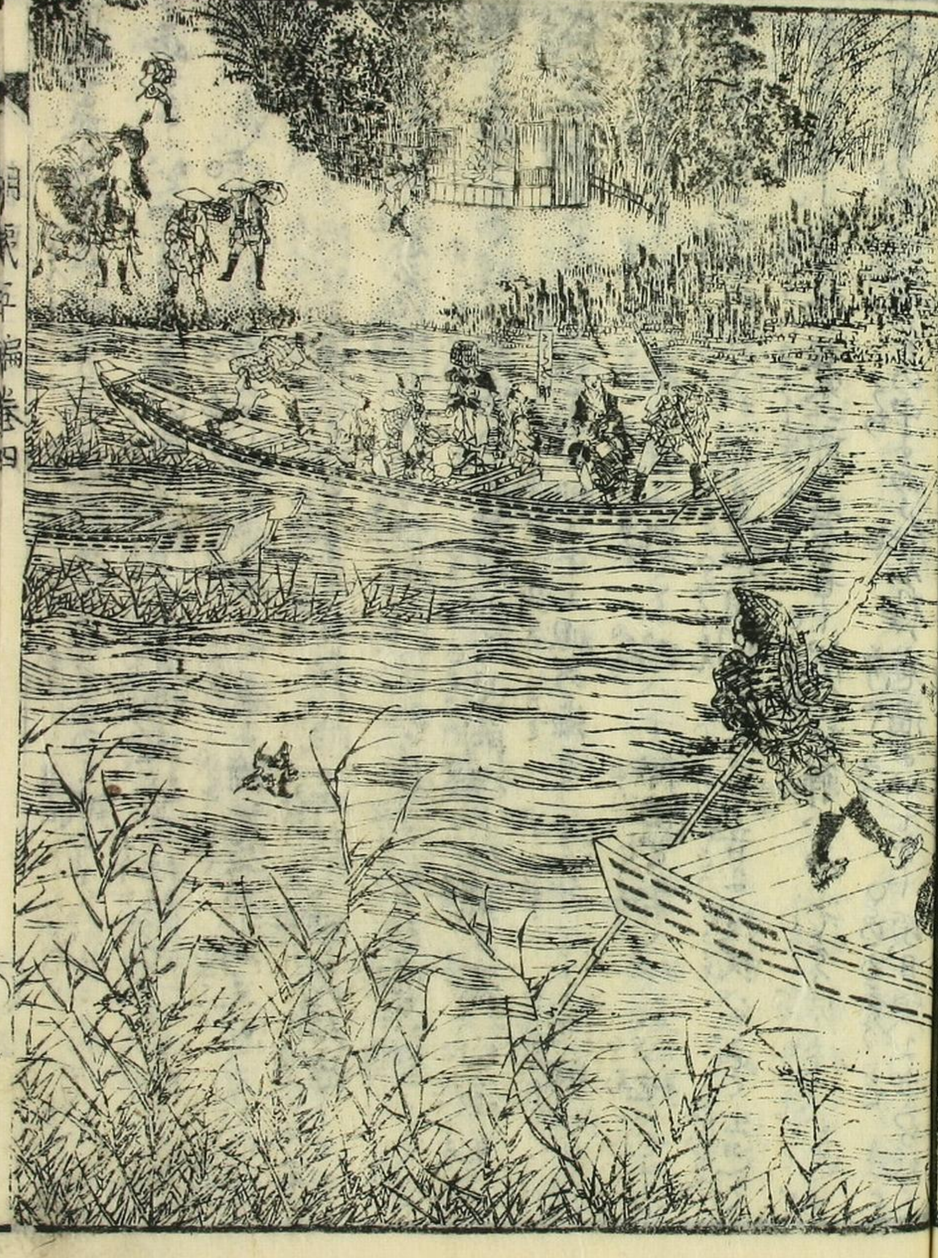
邁遭の矢口渡
出居の拏絆繩

却説藁二郎はその日今巷路多。和田義盛の新第へ。桜枝が饋物の一包を齎邁て。守戸が回翰を取得てけるゆゑ。障るものもなければ。やう〳〵久しく心おちゐるく今宵も亦彼小町が客店へ。暁ゆくこの地の風聞を捞問ゆゑ異なるものもなければ。原来冠者御夫婦も恙なくて。ものとなるべき。後やもさへ心後へて疲労を増せども。聊も懈らず。翠の赤明の宿をたちて。又只管に急ぐよ。九十餘里を輙く来る。矢口の船歩もまた比申の時ハ些〻過ぐる折前面なる東の岸より漕渡る船を遥よえ久れバ人駕衆

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

なる中に兄穂之助に似るあり。あるいふ。そぞろに晴を定めぬるべきなり。紛ふべくもあらぬ兄なれば心忽地飛ぶごとく歓び甲斐もあるべくは船もあれば乗るべき。岡れてなほ抗声を張り立て頻りにその名を呼び被るに彼処にも頭を回して年ごろあまたをこれども川風の烈しきに吹かれて己が呼声の定かならぬを点頭やうの応をせざれば東へ彼は西へ漕離れゆく船あれば着く間は遠ざかるぬ。迷惑せず限りもあらぬを身ひとつ乗る船もねば西へ返せといふよりも。心頻りに焦燥のみ。はたまたつのぬるに側なる両個の賤夫おのく簀に乾魚を背負ひ西に向かく立てり件の船を遥かに彼は小壺の浦太郎なり。近属左右に造化ありて活業をせぬにはけだし何かの所要ありしく。あらぬ人来うんとうも譚ふ兄のすがらぬ状ども名の異なれば忽卒に問ふんはいかぶ。これも亦癖を撥くに猶乾を隔ぐごとく兄果は夢の覚るに似うとうくまる程船はそも東の岸に着かれば人みな散動く江浦に登るおのれのみかてあるべきにあらず。蓮もやがてをりて熟思ふ従又この船に乗て再び彼処へ行かばと人聚合ひ船を出さんとあるべき特り遅に後れ追ひもいでうに及ばぬ。はたはた果敢なくこれ兄に名告り値ひ別ることもあらずして西の南欲鎌倉四下をよく索ねばいかぶ環りたまへるに及ばぬ且今船の中なる魚商人ほが噂せしはこれ兄のまことに似うに倘果してあらんにはこれ浦太郎とぞいふ兄の更る今の名なるべし小壺とぞいふ鎌倉なる小壺の濱なるべしいかでかれば游く索ぬべきにあらぬ。憑よその面をなく再會の素懐を遂ぬはいまだ時の至らぬなるべしさばれ彼商人ほが云云といふことを年来祈る神仏の彼人この言をそ後の日其処に赴かく對面せよとの示現なるべ既に斯心つねに直にあるより引くべしと小壺へ向かひ大事の使を仕うれば稍その


巻ちろみ
棹とをつゝ
うそ竹の
矢ごろの波
永あきらん



回翰を取り出し平晌なりとも遅滞せバそれ兄子のミ誠めらく彼方ざまにハ不実之ものせずしかくやせましと思ひ難て贍る空に鳴後れたる杜鵑只一声の珍しく不如帰とうたへバげにハまづ帰るに不如と尋思して遂に踵を旋らしつゝ又いそぎくの路を走りて今宵ハ渋谷に宿投りけるを蚤に責られ蚊に叫れて睡られぬ随に夫口のするをやバ本意なき限りなれども値んよしげのなりけりとおもひ又せバ楽くて目睡もせぬに程なく暁る旅宿の床を起出て且閑涼しき風に吹れて湯嶋の岱まで来にければ東を迎に眺る上總の海より日ハ升りて辰牌なる過ぎりを是よりも亦復急ぐ程に熟たる路ハ十餘里を鄰へかえ心地して其の日申の比及に太田の荘へかへり着ぬ角門より入る足音に桜枝ハとく出迎てあないと早しと労へバ蒙二郎ハ背にせし袱包を解おろしてそが侭桜枝に遞与しつゝ是なん回翰ハこの中にあなんつれバ庖湢に水もてし頃日頻に出あり侍て人目ありけれバその程ゐ竈乃水焚絶しぬるぞや僕ハ土足序に水汲入れて躰てやすらんまづ姫うへにそん回翰をとう也まゐらせ参へうしと只今桜枝ハ禁めあへざりつ今急ぐにもあらぬに草鞋を解て休ひ果てなバまづ姫うへに云云とやあげ歎し辛んとく是坐邊へまわり爰と回答てそが侭袱包を引提て奥のかた赴就にその日間中守直ハ猛に鄰郷なる荘官許招れて出かし侭にいまだ還らず且見姫ハそのをり彼是心にかゝる夏の雲候ハ夕の雨なりて暑ぬ日消し左に右に慰め難なる折しもあれ今蒙二郎が歩りしとて桜枝ハ走り跌くまでに彼一包を齎ければ是バ且見姫ハ海を捞りて珠をとりぬし心地して其を拝ひより早かれど文衣も是れ回翰を賜ぬるかとて疾その包を解てよといへバ桜枝ハ遽しく二重の包を解披けバ守戸が回翰なくれか其ゐ封推断ぞれを先光仲の無異を述て此度その姫うへより進らせ給ひし二包を早速くせまゐらせしよしと云云と宣ハせしぞ。

請勧めて、ねんかへーと、ゆくうりてこの便りに届け進ぜ吾倚へもいと珍しき鞦韆の
鞦を賜て勧び祷りこの頃ハ古の殿の猛き移徒のまをハおて今巷路の東北
御館へこの移らせ給ひ侍局をの麁破なる何ずもあぐ者つ侍ぐ給ひ
後の日ゆをこれらのをまーゆと書う。且見姫ハ云云と。桜枝が讀ゆとうち
笑くこれハ俄頃の移徒ゆく倉卒なる折りうを支よく整へられるそこのこの
叔母前の天くなる誠心ゆとあれあるる郎の翰回翰とそこ包と
引すとその一包を被ぐくなる回翰と、ゆのハあぐ曝ようぐ贈りこる。
尺素の封度を断るのを像見の扇を巻篭に舊の侍を返れうあくいふ。
とぐうりを主後忽地與醒くをゆうるるをあるとぐ。ん回
翰ハこの中ゆありるゆと紫の服帛包を解ぎけばこれやもゆ副翰と包篭
とぐ返れる訓ゆす限りゆれば。ぐ尺素ぐうり筆を誤あるを心よ

ゆとかくハ返をゆ抜とそゆふう挙る副翰の裏を識せゆをあれをハゆを
引ゆくそられバ一首の歌わく。忘れてゆられやハ汲んれもゆく高野の里ゆ玉川の
年魚三行半を書るハ是疑べくもあるゆ光仲のゆ迹を且見姫ハ行返ーゆへて
ゆ吟しを桜枝ハ何と笑てゆをハれ弘法大師の忘れても汲やゆん旅人への
高野の奥の玉川の水とゆをせ抜ーゆ歌をゆ抜ゆを大師の歌ハ紀の玉川の
清ゆを愛く旅人の玉川の名を忘ゆとも汲でゆ過ん汲つべーと愛ゆーゆへーを。
歌のをうをぬをゆのゆ中葉より謬て紀の玉川ハ毒水とられバを高野大師の
云云と詠ゆとひをて為へをゆう玉とゆ名を負ーゆる清ゆ流れ濡衣被を。
汲む人ゆくなりーゆハ閑象神の怒りをゆをの淵崩れ水絶く今ハ名のをを送せーー
ゆを家尊の大人の宣ゆるゆ侠の歌ハ世の俗の謬傳へゆる隨ゆ紀の高野ゆ
玉川ハこれ名を毒水とられバ武蔵の高野ゆる新玉川の鞦の鞦ゆこれゆ

愛めと詠めり。そうそあくめと蓋の蓋を桜枝は取らして見めの蛇の
舊の侭めくく只一つを彼くくよ留められうともが一紅を
蛇の色の何とめく初は変りしめく紅をば詠れし歌ハこの故めと見ども
かくる折くく畜猫の蛇の香をため襲慕めく且見姫の後方より袂の下を潜出て
蓋の中なる蛇ひとつ爪推立く引落を桜枝はうもくく噫姑娘よ正めたまを
せばもあれ退めと叱もどめ蛇引銜く些も放ず眼を光らし背を張りて
嘖鳴威して片隅なる簀戸の法をうへて邁く嘖鳴て件の蛇を
咬ひ竭ぶとえし猫ハ忽地四足を乱くくも遠ると数回苦しむ声いと
悲しく夥しく血を吐くそが侭息ハ絶よけり殊よ怪しき形勢よあく駭く主徒ハ
斃れし猫を惜めども竟よその甲斐なく且しく且見姫ハ沈ミし
頭を擧て涙さしぐむ目を押拭ひ喃桜枝曩よ吾倩が封しく蛇めあれば聊も

異めくもはばかりしよ斯まで烈しく物を害ふ毒を加えくるぶ丈夫よ薄ら
しハ誰が所為めんぞと且見が所行と坐よ精しく憎えも憎く飽くとめ
ハ筆よ怒りの色えく離別の状よ擬へ三十一字を云云と三行半お
書めんめ現めるめ伎倆めお何を恨くるよ枉真へそ妹伏の中を疏くるぞ縦
吾倩ハ去らくとも毒ありけりとえめも暁りて返えを見バるぞ丈夫よ恙ゑ
て幸ひめれをぞ思ひ締めそもこの濡衣を誰ぞ赤ぞ為めも乾めめん
祈へ神めも捨らく過世めを忍びあへぬ声ども立く泣めバ桜枝も倶お
禁めるし涙よ声を曇らく見理りよ彼かし召ば誠心の今ハ彼へ
面らぶとも姫くへよ科めべしめを懇めくく勧めもせくくハが心苦しき
譬えよ物も捨めをもあるもあるぬ蛇の毒よ疑ひかくるぞ叔母のことめを
制めくめよ声高しいぞ守戸が所為めを心紀渠り人よ相譚れて。かう

鬼こゝ迄伎倆をせバ袋の底より物の漏る鮮を返して毒あるすを明る地よ
知らせんやこハその中より所以あゝ人藁二郎を召よゝくさう氣あく問ふよ
外よ彼も亦不覚よ人をあ疑ひをと諭されく沈吟ど。ろう宣へバ寔よ然有
ば藁二郎を招ゝすく彼処のあるを問ばん姫う人も問せ也う。さハそく
立んとする程よ次の間よ人ありて桜枝刀称立ぶもあれをの譯曲よ出をあげて。
ん疑ひを解くべゝよ要時まゝ呼留さう且見姫ハ驚ゝ桜枝障子を
開せく主従斉一これをゝふこハ藁二郎ぞ有る綜の趣次の間よ竊ぶて
驚ゝ憂ひく思念よ案若む屈托の色蒼さあくらも芝折て敷居高ぶ進も
い入らびハをゝ頭を低く黙然としてついゝう且て藁二郎ハ身を坐行て。
障子の裡面へ入りて後方をゝ引閉く額をつゝ姫うさを抱ゝくそいと
無れとあゝ召らも桜枝とのもゝどあん今彼件の錯誤をゝ解くともろ

誌うく。よゝ面ぞある支られども水吸果て見参よ。へうんとゝて憶ぶもの趣
ろう笑く隨よゝ饋物の鮮ゝ初く知るとれバ況毒を加れるハ夢ふ
ぶもこれをあらび。知らびとゝもも通れられ。ぶ慾より釀しる苗ゝをれ。
支の顛末報ゝ人歎ゝをあく実也一昨日未の時及僕ハをゝ鎌倉へ走
着て人ハ豫て案内ハよく知さう彼若宮巷路ゝ和田殿の第へゝ閉門
執接人よ件の一包を遞与せゝよ僕ハ一時許ゝくその人再び出く来つ折戸ゝ
女中ハあれども守戸ゝハ絶て名の違ふあびやそそ俵包を返れう。
僕ハをあるゝ日も使よ立く守戸の局の人回翰をゝ。
しぐゝハ名の違ふびゝと人ハその人訝りくゝバあを誰殿の第ゝとあびと。
問ふく僕些も礙議せび若宮巷路よ隠れ和田左衛門尉義盛殿のゝん
第よあびやゝとゝよその人勝ゝ敢くそハまをあるゝ和田殿の

第なり。主君より賜りたきの人迄より移りぬ。和田殿へ邁んとすれば今巷路の東とぶらひよ。あふれば、と示されり。僕これをおろかに惑ひたる。人を誰殿の第まで。と問せも果ず眼を睜りくれば、何はせんとく邁ひと追立たり。包ハ封の侭なり。怪しとあるもあれば。阿容々々と受とりく。件の第を出去りぬ。近ほとりの商家老件の第を咨問へ。和田殿の舊第へ猛き移りたるまひ〜た。北條時政の町なりとぞ。在鎌倉の大小名多る中より腹黒く。彼方ざまへ入りく忌べく。特に秘密の一包をすゝめ。その程なりとも。その人まで遣ひ。後悔其処に至るかりさられ異なく返され。封も透なれば。聊これは慰めぞ。今巷路なる和田殿の。新第へ入てあれ。包舊の侭なれば。詰問ひもあり。脈く回翰を出されぬと。あの時に稍心ちあく。その彼地を晨に立ち。夜さハいく歩を急きて。かの手を。あるその日を報ずるに眼なく背門の井幹に没とる水。かゝぬ悔ハ器の毒藥。その趣を洩ぬ。驚き胸潰れ。人を身をも恨みの涙。袖を濡らして。これ彼合て推量れば。その毒をもて多賀殿を害せと謀りし人を問ど。知人なれども多賀殿ハ事の本末知召ばこそ姫人を疑ひ。現ちん歎ハ理りなれ。その後よこの頭を殿に贈らせ。とハ果く身を起せば投技ハ急に。苗蔓二郎との何処へぞ死に。知られ侍れ。そも甚短慮なん不審。鮮の日も泳せ。殿の御歌も今ハ。稍のあるを。知れども。知人なれ死く誰う亦鎌倉へ使ふべき折のなくて。隼人の妻を莊官許招。とく出て。仮に姫人の。歎ハ。いぶとも。痛ハ姫人の。歎ハ。相彈ぶに。智恵もいく向なり。落る涙に袖の眼。哭ハ。頭を擡現。この男の正直なり。既に

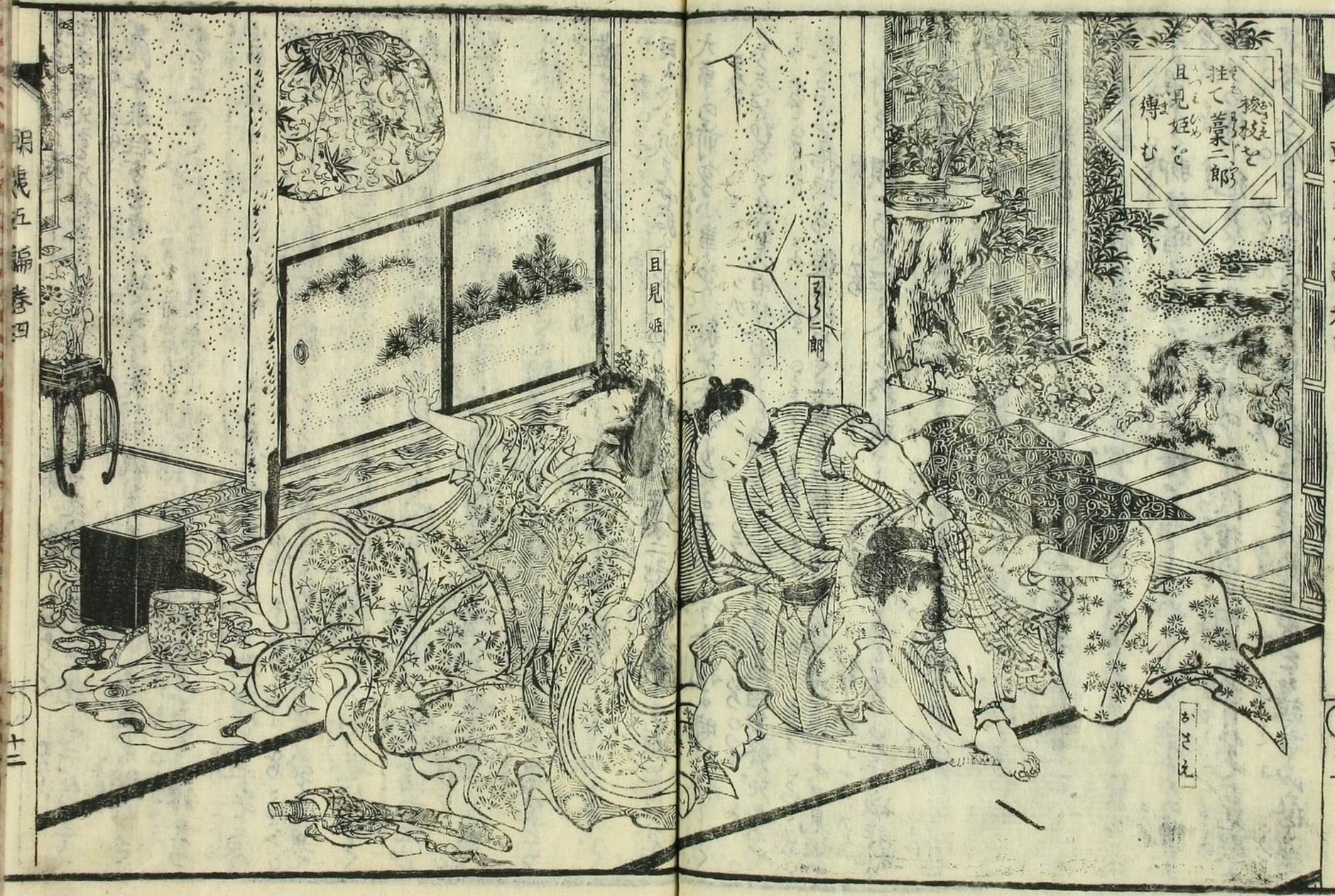
支の破れを及びくその怨を懸むとて。曲を報し彼地の趣を疑ひとけ
れども解とうるに丈夫の名疑ひをいうせんなを藁三郎ころを鎮めく
梭枝が言もうるハが言も安弾抑此度ころ丈夫へ消息を進らせハ官府の沙汰も
違ふと潜びう支れバ中ゆくうくも謀りるその仇人を知りうるも何処へ向く
訴べ兄素より敵ハ威権高ううそもかくも明々地ようる丈夫なを岳かて。
それバそそをぶ命を捨るともその頸を齋くうが丈夫許遣られんや縦その
為ありそを人を殺しと身を立んうるが刃ハ伏をそをけを縁故と棄ばふ
時政ハを故ありくうが丈夫をのいとうう憎をバ彼枉妄も必をせんすあれ。
ども燈据あれバ噂ハ漫よその名を指ぐ。さる讐ぐ兄人の弟へ者べ
しそをあ兄ーをそをあるのを怨ハ法を超人目を竊くこの消息を寄せ
ども身をも怨ハ只丈夫の為とのをあひハ彼飛禽の鵶の啄欲齟齬ふ
水澤の岩ハ姫小松ものが操ハかをもども濁らぬ胸を著ーかく仇あるもいひ易かぞ。
現月も日もうるうを人ハ照ーをいぬ世をうるうを親ハ捨られ良人ハ去られく誰とをいぶ
存命ん絶ぬ歎兄ハ沈んより寃も科もあ兄人の数ハ入らバ草の原身の名果と
さく花の赤兄心を竟ハうるが丈夫ハあーをく苔石淵再びむをぶ縁ーあーバ後の
世をを樂ーが兄れ南無阿弥陀佛と唱て臂近ハ掛置れう獲身刀を撥取て
接放さんとーを兄バ梭枝ハ吐嗟と駭兄く携り禁法巻の上ハ降そぐ涙ハ息
つ兄あを。あを物体ーー姫うを人をかをくーん歎ハをハあをうを乱ををひーー抉
善も悪も陽酸の命ありそを明燈ハ立ん素ハ直兄心操も彼枉津日の神
祟ハ幸ーをを累ぬとも。ぐーをうバ日の光を解ぐあを兄雪霜の迹兄
如く梓弓春とーあん時と日を氣ぐく候せをうーー新やもあうーあ兄大約此度の

なん不和ハ懇なるを勸め侍りしこゝハあり事起るを阿容ることとして姫うま
命を捨させなゝバ形ハ人に似たりとも心ハ獣に劣りなん願ハくハ身を殺して
その亡魂ハ彼君の光仲を枕方に立夢に入りともあん疑ひを解ざるんやさハこの
刃を貸せ給へと諫め勸解つ力を究やく引放さんとしれども且見姫ハ握持
る鞘に巻を些も後ゆ苦況胸に沸復る涙ハ露の玉散る刀尖閃こゝろ
あるを憧に駐やくやう梭枝今ハ是ぬるさの恋心いと浅ゝ思ひどもいそぐ
科を人に負せんとてもかくこもこの身の薄命ゆひ絶る浮世の淵まむ甲斐
絶く水無月の七日と思ひ定めよ
ゆをあらハるゝあらぬ故さゆや故ちそよと引バ引こゝ主従の涙に洗ふ
敷鞘の諸に巻る彩絲に鞘の姫百合小女郎蟻いづれ隙あれ必死の手入浄ひ
難てもあり故さゆ梭枝ハ後方をうゝく喃藁二郎との何ぞ刀に怕て
るを貸ゆひるゆの虚言ゆゆハ共侶に姫うゝを故そや禁めあるゝ
間中ぬしのとく還りくゆに伯ばかくまゝに氣を向すのやハあんゆゆハ形と
怨ゆども藁二郎ハ頷くのゝ始ありほう近く膝を進めく目戍てゝ
且見姫ハ云云と梭枝ゆのを以隙に捉られ両ゆを振解く南無とゝりゆ
刀尖を咽喉へ突立んとゝ思ひ刃の光に共に藁二郎ハ衝と来く刀を
丁とうち落せバ再び含んとしゆを取らしも更ゆ脇を拂そく推禁めと
ゆ程に梭枝ハ刃を取あげくれもゆ死んと内ゝ思ひ透ゆ落て
左右に引着動ゆゆゆゆ目を見ゝ死栄枯良賤定ゆ兄ハ是
浮世とゆゆゆ三位入道源頼政卿に孫女黄綱朝臣の御息女を土
百姓ゆる藁二郎が鑿柄熟し暴者ゆて鷲綱ゆ折檻ハ狗死させゝと
爲ゆゆゆも切ゆる主従の節義にその死を爭ひゆゆゆ女中にうち任ゝく

禁ざりしハ数あるぬ身の賤しきを羞ぢ恥ぢ怪しみ怒りを加へんと始より己が物〻幾遍とあく宵を冷せし苦しみを堪へ察し給ぶや主も家隷も一ト言ふ突詰めし必死の覚期を今又千萬諫めども用ひ給はず然ばとく今この事を放さバ又死んとく狂ひ給ん隼人四の還さ来いふ迄死と雲時按じく左ひよ捉る桜枝が腕を膝ひ楚と引布く腰ひ著る三尺紅をふとあく解くロひて引裂き繋合して且見姫の腕を背へ捻揚れば声うち立く泣ひ口ひふ拭衛しく先こと縛く出屋の柱へかくもあく繋んとする程ひ桜枝ハうちんくうち驚き死ぬ

こをあくこれハ赤あるりのひ狂物体ひ吾さハさせじと敦圉く布れし腕を辛ぎく引脱拂ひく立ひを妨ぬ突ぬ臂ひ膳を磕と撲せし桜枝ハ苦と叫ぶも果ぢ身を轉しく倒れうり怪我ひ驚く葉二郎ハ悔しく為へと彼ハ急

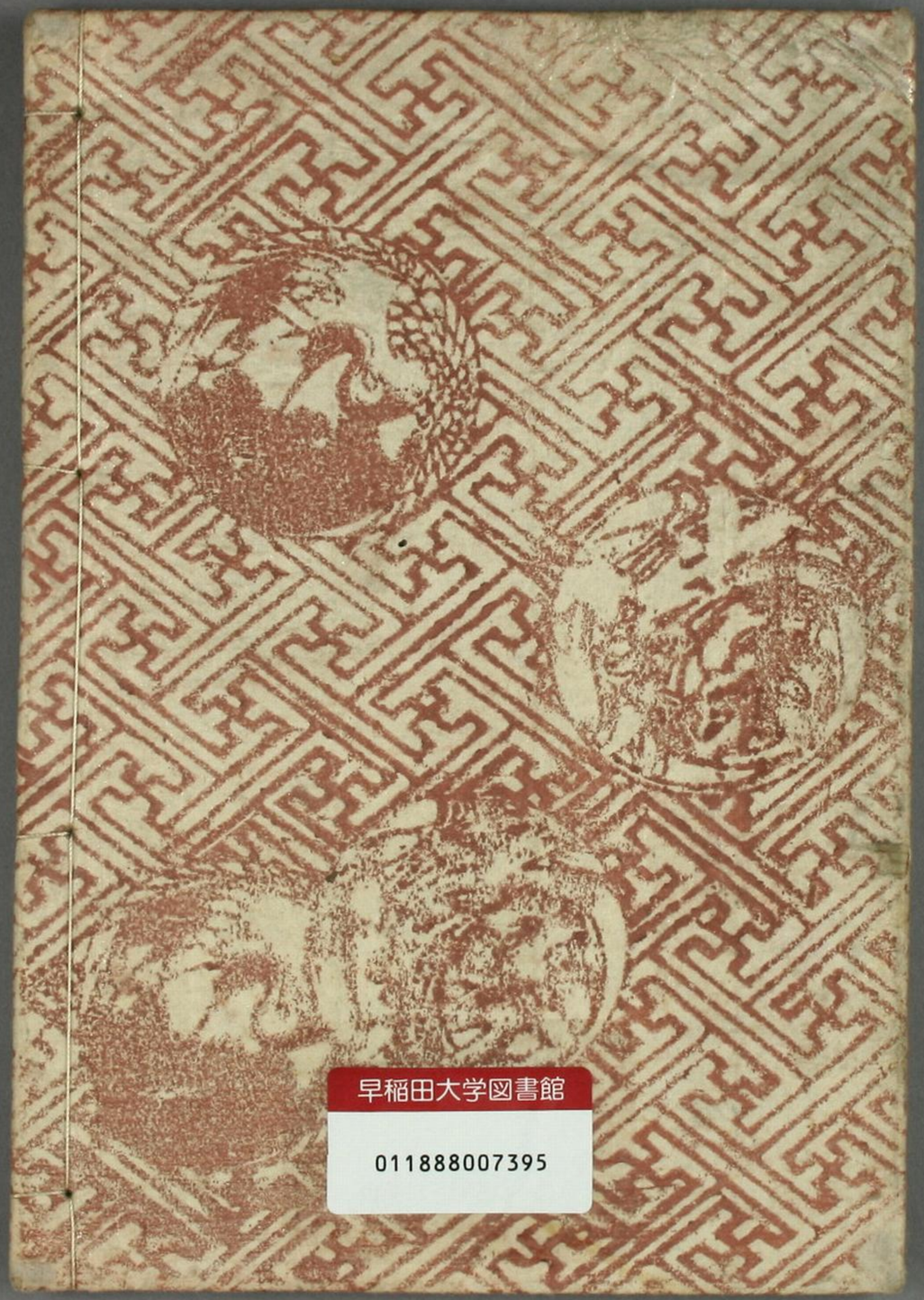
大事の前ある小事ある氣を失ひも死ひ至らず今介抱ひ時を移しく志を遂ぬ甲斐あるうせバその甲斐あるとハ云へ心つくり且見姫を繋ぎ留めて遂ぬ刃を拾取りく鞘ひ納めく上座ある刀架ひ居置き身を退しく且見姫ひ対ひく額をつき姫ひ腹さしく只憎しとひ思召ひ不敬非礼知りつも竜ひ似る傅ハ命ひ恙ひく竟ひ多賀殿のあん疑ひも解て御夫婦再會の導者とあん為ある嚮ひもあげじく漫ひ弟を執違へる僕が疎忽の科ハ死しく単ひ謝ひ目前ひく自殺ん賤人も恥を知り義ひ仗く身の怒を賞ひ死と多賀殿へ告るあるぶあるぶとも霊をこの土ひ留めく聊後暗くぬん身の明燈を立ざくんやしく考ぶてこの縛より妹伏の縁し絶あぶ只君御夫婦の後ぶ後の日何ホの面目ありて吉見殿ひ見参ぶ死ぶ命運のかくハ短き歎くも余餘りありこを諄言ひ伝ぶ僕


梭を
挂て藁二郎
且見姫を
傳む
藁二郎
且見姫

元来異父なる兄穂之助といふものあり。孝友の故をもて逐電して所在をあらず。年来往方を索もとめきのふ矢口の渡ゆくさ、兄をたづねれども船異かく。あやしとおもひて人さの折ふしバ名告も値ひ別れ老さられ聊便宜をぬすみ鎌倉の小壺の浦太郎といふものあるバそを兄の穂之助なるべし果敢ぬ老心あてなる後の日彼処へ赴くべきなり遺ものをもとめ〳〵このあるに夫の妄念浮世の夢と覚果て今亦渡せ死天三途弘誓の船ハ乗合もあれ婆婆の心の送るべし御運ひけく殿共侶ハ鎌倉山ハ家造りしく住つれるあれ比ものあるバ小壺の濱ハ浦太郎といふものありをと諸させくりまゐ兄でゆゆしいるをと僕ハ自殺の趣告さもめん。只願ハ兄ハこのものを人もあるく身を愛しく餞の栄を供も千萬ひとも盡せぬ詞言なも身の暇をあらん名残惜しもとひみく背向まるく目ハ交る涙ハ尽せぬも哀れなり且見姫ハ蒙二郎が自殺の覚期を目おかる。

その遺言を耳ハ聞けども物ゆい尽ぬの働ハ轉つ輾つ身を悶て乱れ〳〵ハ黒髪の千行の涙ハ人の死も禁りもぞ泣ぬ蒙二郎ハ其を見ん〳〵て憶痛おもとゞぶ尽ぬ心を鬼ハ つ遥ハ西をも仰ぎく又恭しく頭を鴻恩禀る冠者御夫婦心の足らぬ某を入ずくおぼし召ても太田の殿へ赴ハく且見姫を慰めもて依さ〳〵ひ甲斐もなくあるあれ怨ぬいぐ〳〵とゝん詞もゆ。この世のくハ主従のもん縁しハ短くとも牛もあれ馬もあれ生まとゝりく仕へまゐん願ふハ御武運長久ハ絶る家を興しあん多賀廣ハ面ぎもなく勧解まるるバ是時の不祥ものを許さ老とひとりごちく此方ハ対ひ朝夷ぬ〳〵へ今生の辞別をまゐ。去歳の春ハ立く復讐の本意を遂る恩義をまゐ。御庇ハ立く復讐の本意を遂る恩義をまゐ。なくも酬ものれ別ハ冥土の障りもとも冀くハ百歳の

鈴をとゝのゝく六合よりのゝく名を揚げ三界の他の人々一旦恵を乗こう。
稲荷へもあとゝのゝとゝ捨てゝ西へと対ひ特の本意所
こゞ舎尼別れ一日ゝ日まで環りの人と思ひ仇よ流れ光陰の矢の渡で外
ゝ憂見る面影の身名を立てゝ忘れも申ぬ心の哀れ霞ぬ恋の夜の月の
真如とゝゝ恋ゝ悪よ深ら人の為よ狂ひ申せ事ゝ行ゝ非命よ終る
只是過世の業報決いとゝ孝心篤ゝ兄ゝ慈ゝ親の
因果端ゝ環りゝ身ゝ報ひけん五逆十悪无量の罪も懺悔ゝ
滅ぜゝ済せ阿弥陀仏弥陀仏々々と念れば諸行無常と吾ゝ
鐘の声月ハ撞ゝ影ゝ心の間ハ照ら白金のごとく明ゝ
次の間ゝ捨ゝ行ゝ引提来て捧四五寸挟試ゝ取ゝ右遣ゝ
れ素ゝ村落ゝ痩百姓の子ゝ腹切ゝ知ら美ゝ悪ゝ



早稲田大学図書館
011888007395